# 柳生武藝帳

卷之五

## 緋　鯉

五味康祐

柳生武藝帳

緋鯉　五之巻

昭和三十三年七月三十日　發行
昭和三十三年八月二十日　二刷

定價貳百六拾圓
地方賣價　貳百七拾圓

著者　五味康祐
發行者　東京都新宿區矢來町七十一　佐藤亮一
印刷者　東京都千代田區神田神保町三ノ二三　塚田重
印刷所　東京都新宿區矢來町七十一　塚田印刷株式會社
發行所　株式會社　新潮社
電話東京三四局代表七一一一(九)
振替東京八〇八番

製本　神田　加藤製本所

# 卷之五目次

六劍士(一)……七
六劍士(二)……一七
京都代官……二八
玉蟲……三八
七騎落……五一
寒夜ニ聞霜ノ太刀……六三
密使……七六
仙洞御所(一)……八六
仙洞御所(二)……九七
柳馬場……一〇九

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

嗣長卿邸……一一九
花の色……一二九
宇治橋……一四〇
杖の徂く道……一五二
仁術の隠者……一六〇
眼疾……一七一
御不豫……一八三
緋鯉……一九三
癰……二〇三
右脇臥……二一三

火著……三〇
謎解き(一)……三三〇
謎解き(二)……三三九

装幀・挿絵　木下二介

# 柳生武藝帳

卷之五

# 六劍士 (一)

重宗が明かしたのは友矩には思いもよらぬ事だった。六十六部・蓮眞が越前忠直卿の黒幕だというのである。

蓮眞は師は不明だが中條流を修めた兵術者で、元日夏勘解由左衛門（又は單に勘解由）元春といい、越前忠直卿に仕えた。或る時、高倉某なる武者修業者が來て、忠直の家臣が多く其門に學んだ、忠直はこれを快よしとせず、臣下六人の達人を呼んで高倉との試合を命じ、高倉にも其旨を使者を以て通じて翌日登城せよと云いやった。高倉も之を承諾した。

さて當日、六劍士の登城は勿論、拜觀の諸士も登城したが、高倉は登城せぬので使者を遣って見れば逃亡して居なかった。そこで忠直は中條流の小太刀が見たいと言い、六劍士の一人に、蓮眞——勘解由左衛門との試合を命じたところ、蓮眞は老年の故を以て辭退をして何としても立合わなかった。高倉が六劍士を相手に如何なる術を披露するかと登城した諸士の目をなぐさめるため、忠直の云い出したことだが、我らは家中の士に手の内見せる雅心なしと勘解由は突っぱねたのである。

忠直は之を憾みに思って、其後自ら勘解由を殺そうと決意し、一日勘解由を呼びつけると、「汝と試合を致す。」云って脇差を拔いた。勘解由は小太刀代りに木刀を以てふせぎ、忠直が如何にしても斬込むことが出來なかったので、その脇差を投出して、汝の藝は寔に神の如くである、この脇差を汝に與える、と言って遣わした。それからは諸事、勘解由に對しては態度を變えた。

そもそも忠直は越前宰相結城秀康の嫡男である。秀康は將軍秀忠には兄に當る。

慶長十二年、父秀康の死去によって家を繼ぎ、越前六十七萬石を領した。大阪冬の陣には祖父家康に從って玉造口に戰い、翌元和元年夏の陣にも天王寺茶臼山方面に於て大いに眞田幸村と激戰のすえにこれを斬った。

この時の戰功に對し、家康は當座の賞として初花の肩衝を與え、追って領地を加えるべき事を約したので、忠直は戰功の家臣に對してまた所領を加えるべきことを約したが、その後、忠直は參議從三位に敍任せられたのみで、家康より何らの賞賜もなかったから、大いに自負を疵つけられ、また家臣に對する面目もあり旁々不平懊惱に陷った。

もともと前述の如く、父は秀忠の兄に當る、本來なら家康の後を嗣ぐべき立場という自恃がある。然るに叔父秀忠に將軍職がゆずられたので、家康の歿後は病いと稱して殆んど江戸に參覲せず、秀忠に對しても不敬の行いが尠くなかった。幕府では兼々そのため忠直に隙あるのを待ちのぞんでいたが、偶〻永見一族を成敗する事件があったので遂に封を奪って忠直を豐後に流した。

永見一族成敗の事件というのは、忠直暴虐の喩によく引用される咄である。



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

秀康の急逝の時殉死した家臣に永見中務なる者があり、中務（殉死のとき二十四歳）には右衛門尉なる遺兒もあったが、未亡人池鯉鮒殿の美貌に惹かされて忠直は側室に召そうとした。未亡人にすれば、いかに主筋とはいえ亡夫が殉死した人の子である。人情としても忠直の寵愛を受けるに忍びない。いっそ、「黒髪あればこそ人に袖もひかるるなれば髪剃りこぼち、亡夫が後世を弔わん。」そう決心して落飾して尼になった。

これが、却って忠直の癇に觸った。

さなきだに怏々と愉しまぬ日々である。おのれ主君にたてつくか、と大いに怒って、

「おのれ忘れ形見あるゆえ我が意に添いかぬると申すなら、何故まず遺兒右衛門を僧門に入れても主君が寵を受けん、との眞心を見せぬか。且つ又、我が愛を人道に非ずと拒もうなら、いっそ潔よく一命を絶って申せ。落髪などの貞女づら許せぬ。」

言って、家士を召し集め、主人に對し無禮の言動ゆるすべからず、すみやかに右衛門を刺せと命じた。

これが永見の方にも傳わったから、一族郎黨屋敷に集って手の者をかり集め、槍よ鐵砲よと犇めいた。忠直はますます憤り、さらば軍兵を差向け彼等が首、ひとつ殘らず刎ねよと嚴命し、あわや福井城下が騷然となろうとするのを、老臣本多丹波守が馬に鞭して永見屋敷に出向き、赤心をあらわして鎭撫したので一時は事無きを得たが、その丹波守が永見屋敷へ赴いた時に、籠っていた一族の中から、

「あれ好き敵ござんなれ、かかる上は丹波守どのを討取り腹切らん、さすれば寄せ手何萬殺すより面白し。」

と喚き立てた者のあるのを聞いた忠直は、其の年元和八年大晦日夕刻、不意に二、三百騎を差向け永見の郎黨にいたる迄悉くを斬らせた。家臣を手討にするのが別に暗君の所業とのみ限らなかった當時とすれば、大して異とするに足らぬことと忠直は思ったろうし、秀吉の松丸殿の場合や近くは祖父家康の愛妾何人かの場合にてらしても、おのれだけが非道の欲望を持ったとは思わなかったろう。たしかに家臣の妻を欲することなど當時では普通の社會感覺である。

幕府は併しそれを責め、翌元和九年、遂に忠直を豐後國萩原に流し、五千石を給して剃髪せしめた。忠直はよって一伯と號し世を捨てた。

——その間、勘解由は旅に上って福井城に居ない。丁度忠直の流謫されたとき江戸に立寄っていて、直ちに福井へ歸ろうとする處を秀忠に制せられ、下命に據って身柄を預けられた先が、侍從永井信濃守尙政のもとである。年餘を經て、ようやく九州豐後の忠直の許に行くことを赦されたが、爾來、勘解由も剃髪して蓮眞となった。ほぼ十二年前の話である。

——今、忠直あらため一伯は蟄居して尙も豐後に在る。秀忠の薨じる前、三代將軍家光の內命を受け九州隱密の旅に赴いた柳生十兵衛の使命のひとつが、忠直卿の動靜をうかがう事にあったのは友矩も知っている。由來、德川家には二つのタイプの武將があらわれた。一は越前宰相秀康、一は將軍秀忠である。秀康は家康の第三子に生れ、生母お萬の方が系統(すじめ)卑(うしみ)しい爲三河國產見で成

人したが姑くは家康も公けに子としなかった。秀康幼名於義丸という。或る時兄の岡崎三郎信康と忠臣本多家次の忠言で、初めて父家康の膝に抱かれたのである。

ついで十歳の時に人質（のち養子）として豐臣秀吉のもとに置かれ、猛將福島正則や加藤清正を市松よ、虎之助よと呼んで遊んだ。十二歳のとき三河守羽柴秀康と名乗り、のち東國の名族結城氏の義子となって結城姓を繼いだ。人はよくこの秀康を伊達政宗とたとえる。

「秀康若し德川の一門に非ず、家康の子に非ずんば空しく中原の鹿をして秀忠に與うる者に非ず。」というのである。

いわば子の忠直も含めて、岡崎三郎信康、薩摩守忠吉、紀伊の頼宣などは同系列に屬する勇將だ。これに反して二代將軍秀忠、尾張の義直、水戸頼房などはどちらかといえば溫良の領主である。德川氏の系統には、常にこの勇猛と溫良の二面を觀る。幕府にあって天下の政務を補佐する者、諸大名の動靜とは別にいわばこの剛柔二面の血の動きにも目を配らねばならぬ。但馬守宗矩は宗矩流に、所司代は所司代の立場で。とすると、或いは、眼前の板倉重宗の胸中に在るものも究極は父宗矩の意圖するところとさして違わぬのではあるまいか、そんな氣がふと友矩はして、一概にこの人物と敵對する必要はないかも知れぬ……そう思った。且つ、一伯となった越前忠直卿が終生を西國の果てでこの儘おわろうとは思えない、若し忠直卿にして鬱々の覇氣を沮いきらぬなら、武藝帳をめぐった浮月齋一派の暗躍は便乘の好機であろうし、安藝藩淺野長晟のもとに在る寺澤半平を動かす者も或いは浮月齋でなく蓮眞その人かも知れぬ。

友矩は、かれを想い之を思うと漸やく顔面紅潮した。

が、何事も口外はならぬと江戸で嚴命された身である。所司代重宗の意が天下安泰を究極にのぞむにしろ、禁裏への在り方だけはどうやら柳生者と異る。

「先程より申されること、當方にては何のことやらトンと判斷に苦しみ申す。」

皓い齒を見せた。重宗の方でも薄笑いは消さない。「左樣か。」あっさり頷いて、緣側を返り見、「原田、どうやら只のねずみでないと見たは予のあやまり。無冠の普化僧如きに、要らざる時刻を費した、差構いない、釋放致せ。」

あっと心中に友矩が叫んだほど、呆氣なく吟味を打切って、

「まさしく結城家浪人大崎十左衞門に相違ない、起て。」

下知するや自身袴を捌いて奥へ入った。結城氏に仕えて美濃の浪人大崎十左衞門とは、吟味に當って友矩自身が名乘った事である。その身が曾ての結城家師範役日夏勘解由左衞門を知らなかった。出まかせの口上は忽ち露見していたわけだ。それを敢て重宗は解放した。

その足で、重宗は下京櫻之町誓願寺へ出向いている。大久保彦左衞門に對面のためである。もともとそのつもりで二條城を出たのが不審の虚無僧吟味に時を費したのである。

誓願寺は現今と違って當時の境内六千三十餘坪、すこぶる繁華の寺院であった。秀吉の愛妾松

丸殿の造營である。松丸殿は京極氏の女で初め若狭の豪族武田孫八郎に嫁したが、本能寺の變後、孫八郎は秀吉の爲に近江の梅津で誘殺された。松丸殿は名を龍子といい絶世の美人だったので、秀吉が之を奪わんため刺したのであろうという。後年、淀殿が寵を專らにした如く傳えられるが、いわば秀頼を產んだからで、側妾としてなら龍子の方が寵愛いちじるしかったと傳える。天資の美貌も松丸殿が拔んでていたそうである。文祿三年春、伏見の築城のなった時、同城松の丸を與えられたので松丸殿と稱するに至った。秀吉の薨去後は尼となり、以來寛永十一年九月まで京西の洞院の邸に在って餘世を樂しんだ。その間誓願寺は德川氏から寺祿十七石を寄せられ、境内には紅梅數株あって如月の頃は人々ここに集まり未開紅の艶色を賞したという。又、塔頭長仙院の庭は佳境として名高く、同じく竹林院には小堀遠州の數寄屋あり、これを遠州の八窓という。彦左衛門が宿所にしているのも竹林院で、庭中の風景絶倫である。

重宗が案内を乞うと直ぐ通された。

控えの間に昨日の浪人二人。相手が所司代と分っているので、四角ばった會釋はしたが何やら視線を避ける。

彦左衛門はすこぶるむつかしい顔色である。挨拶を述べて重宗が對面に着座すると、

「コレ、所司代どの直々にこの爺をお訪ね下さるというに、澁茶では非禮じゃ。點前でも致さんか。」

皮肉を利かせたつもりの叱言を傍らの女性へ言う。重宗は蛙に水がかかったほどにも反應を示

さなかった。
「その節は思いがけぬ出會ゆえ馬上の儘にて失禮を致した。」
わざと鄭重に頭を下げて、
「祇園の櫻には季節がチト早いかと存ずるが、遊山でもなさろう御上洛でござるかな？　それとも何ぞ、お上より内々の御沙汰にて、上洛をこの重宗には内密に致せと――」
「十三郎。」
彦左衛門への字に結んでいた口をひらいた。十三郎とは所司代の職に就く前の重宗の名である。
「かりにも神君より天下の御意見番いたせと申しつかって参ったこの彦左衛門にお主、意見しようとてかい。」
「何も御意見なぞ申上げる意は毛頭ござらぬ。役目柄、一應詮議申上げるすじあって参った迄のこと。」
「すりゃこの儂に怪しいふしでもあると申さるるか？　面白い。何なりと問われい。但しじゃ、お手前所司代の職分にて物申すなら、身共江戸御旗奉行の立場にて後刻糺明致すことがある。とんと、その心得あって問われいよ。」
「これは笑止のお詞。その儀は念をおされる迄もござらぬ。」
「よし。何を詮議しようとて参られたの、さ、問わっしゃれ。」



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo